

『今、福島原発の事故現場はどうなっているのか』

講演会における吉川彰浩氏による証言より

2013年8月5日 杉本 直也

はじめに

福島第一原子力発電所における大事故以来、東北ヘルプにおいて、当原子力発電所の状況は重大な関心事になっていました。この度、事故当時に東京電力の正社員として福島第二原子力発電所で従事しておられた吉川彰浩氏による講演会が7月20日(土)に仙台YWCAにおいて開催されました。東北ヘルプ理事の皆様および多くの職員の皆様の時間の御都合がつかない状況の中、個人的な関心もありまして、杉本が講演会に参加いたしました。以下、吉川氏の証言を可能な限り記録および要約しましたので報告いたします。

1. 事故当時の吉川氏の周囲における状況

東北地方太平洋沖地震発生当時、吉川氏は福島第二原子力発電所におられました。終業時間も近づいており、コーヒータイムでくつろいでおられたそうです。非常に大きな地震のため机の上の物が散乱しましたが、2007年度に発生した新潟県中越沖地震の後に耐震補強が行われたので、彼は原子力発電所が安全であると考えておられたそうです。

地震がおさまった後、初めに行った作業は事務所の安全確認であったそうです。事務所内には原子力発電所の発電機出力を表示する電光掲示板があり、「0 MW(メガワット)」と表示されているのか確認したそうです。要するにきちんと停止しているのか確認したわけです。

次に、高台にあるグラウンドに避難して所員および関係者の方々の安全確認を行ったそうです。ただ、グラウンドは高台にはあるのですが、周囲が木々に囲まれて海が見えないようになっていたそうです。発電所はグラウンドの崖下であり、地下二階構造になっていたようです。グラウンドに集まった方々も「この位の地震では安全は脅かされない」と思っており、楽観視しておられたそうです。安全性には大変自信を持っておられたそうです。そして、殆どの所員が津波が来るとは思っておられなかったそうです。

ところが、津波は来てしまいました。グラウンドからは海が見えないので殆どの所員は津波を見る事ができなかったそうです。発電所地下には緊急時に稼働するD/G(ディーゼル発電機)、バッテリー、電源設備(この設備を経由して発電所内に電気が送電されている)があり、水没・汚損の恐れがあったそうです。津波が来て初めて「とんでもない事が起きた」と自覚されたそうです。

このような事情がありましたので、津波の後、福島第二原子力発電所の原子炉を冷却に持ち込むまで

に4日間程かかったそうです。福島第一原子力発電所において大事故が発生し、放射性物質が大量に放出されましたが、関係者の方々は被曝覚悟で復旧作業に従事されたそうです。

2. 現場で復旧作業に携わった方々の状況

集会の場において、所長が、これからは大変な状況になり、命懸けの作業を行わなければならなくなる旨を社員に伝えられたそうです。そして、現場に残ってもらえるよう社員にお願いされたそうです。福島第二原子力発電所には、東京電力の社員が約800人、協力企業等の人員を入れて約2000~3000人おられたそうですが、多くの方々が家族と共に発電所周辺に住んでおられ、自ら進んで現場に残る意思を示されたそうです。彼らは被曝を承知で復旧活動に従事されましたが、中には自分の家族の安否すら分からなかった方もおられたそうです。そして、福島第一原子力発電所の3号機が爆発した事で現場はパニックになっていたそうです。ここで強調いたしますが、彼らがそれでも現場で復旧作業に従事する事ができたのは、『日本を守るためではなく、家族を守るため』であったという事です。

3. 福島第一原子力発電所で従事しておられる方々の状況

現在、現場では経験豊富な人員が辞めていく中、「辛うじて」人員が足りているそうです。つまり、本業の方々が辞める代わりにやや経験の浅い他業種の方々が従事しておられるという事です。その背景には以下のような状況があります。

○バッシング

原子力発電所に携わる方々へは例えば次のような言葉が浴びせられてきたそうです。

「お前らが死ぬ」

「汚染されたタンクの水を飲め」

「死んで(原子炉を)停めて来い」

○居住環境の悪化

賃貸アパートが不足する中、民宿の狭い部屋にすし詰めで寝泊まりしておられる方々が多いそうです。借り上げのアパート・仮設住宅はまだマシだそうです。

○待遇の悪化

所員の給与が減額されたそうです。多重下請け構造が存在し、給与がピンハネされ、危険手当がカットされる事があるそうです。むしろ除染作業の方が待遇が良くなっていて人員の流出につながっているそうです。

尚、世間では東京電力の社員の方々は高収入であると思われていますが、20歳位であると社員ですら

年収 200 万円に満たないそうです。作業員では月収が手取り 10 万円にもならないそうです。ですから若い社員には東京電力に留まる事をとて勸める事ができないそうです。

4. 近い将来における大事故の危惧

現場で 30～40 年作業に携わった方が「廃炉は 30～40 年かかってもできない」とおっしゃったそうです。廃炉は世間一般の方々が想像する程簡単にはできないそうです。

現場では経験豊富な方が辞めていくので作業の質が下がっているそうです。ですから簡単にミスが発生しているそうです。ネズミが原因でショートが発生し、電源が一時停止した事もありました。作業員は精神的にも追いつめられており、このままではノイローゼになるなどいつ精神に支障を来して重要なケーブルを引き抜いてしまうのか分からない状況になりかねないそうです。何かが起きても応急処置しかできず、汚染水に関しては貯める事しかできないそうです。

このような状態なので、吉川氏は近い将来、大きな事故が起きるのではないかと危惧しておられます。

5. 被災者としての吉川氏

吉川氏自身も被災者であり、東京電力より 1 人 1 ヶ月当たり 10 万円の補償金をいただいております。詳しくは、ご夫人と合わせて 1 ヶ月当たり 20 万円をいただいております。福島県の住民からは「いい額貰ってるね」などとバッシングを受けておられますそうですが、補償金を一生受け取る事ができるわけではないそうです(補償金は固定資産税から算出され、帰宅困難区域在住の場合には 5 年で打ち切られる)。休業補償も何年も受け取る事ができるわけではないそうです。

このように、吉川氏自身も苦しんでおられます。

6. 質疑応答より

Q: 「原発事故では死者が 10 人発生したと聞くが?」

A: 「2 人が津波で溺死した。第二原発では排気塔での負傷が原因で 1 人亡くなったと聞いている。」

Q: 「原子力にはいい事が無いのではないか?」

A: 「震災前は、二酸化炭素を削減でき、継続して高出力を維持する事ができるメリットが認められていた。自然エネルギーを利用した発電所の出力は低くてまだ試験段階である。尚、現在私達を支えているのは火力発電である。但し、保守・点検に携わる作業員によれば、火力発電は設備が剥き出しになっていて老朽化しているようだ。恐らく再稼働が進められる背景には火力発電所が使えなくなった時に原発が有効であると考えられている事があるのだろう。ただ、たとえ原発を脱却するとしても、今すぐに原発無しでの生活が可能なのか疑問だ。今までの生活をすぐに変えら

れるのだろうか?個人的にはゆるやかな脱却が望ましいと考えている。」

Q: 「再稼働についてどう思うか?上の人間に対してどう思うか?」

A: 「再稼働については上の人間が住民に対してきちんと説明できていないと考えている。もう少し一般の方々の身に立った説明をして欲しいと思っていた。でも、私は本店の方々を尊敬しているし責める事ができない。彼らは激務に追われているし、私達のために分厚いマニュアルを作ってくれた。」

Q: 「原発の保守・点検については?」

A: 「厳しい法令があり、点検・改修計画表を作る事になっている。何十万もの機器があり、実際には稀に点検漏れが発生する。但し、自分達のミスについては届け出て再点検を行っている。データベースもある。尚、現場は隠し事をできる環境にはないし、隠し事を行えば余計な仕事が増えるだけだ。」

Q: 「核のゴミについては?」

A: 「廃棄物の処理に関する学習をする機会が無かったので分からない。但し、研修はあった。」

Q: 「線量計が不足しているようだが?」

A: 「多くの線量計が津波で失われた。パニックになって線量計を捨てて逃げた人もいたと聞いている。だからまともに見える線量計が少なくなった。尚、建物の外では線量計を使わなくて良い事になっていた。原発事故における被曝後は被曝線量を計算で見積もって把握し、一覧表による管理を行っている。」

おわりに

以上、報告いたしました。会話を断片的に文書で再現する事に努めたため、誤解を与える表現が文書中に見られる可能性があります、どうかご容赦くださいますようお願い申し上げます。

吉川彰浩氏(33)略歴

15歳 東電学園高等部入学

18歳 福島第一原子力発電所で勤務開始

28歳 福島第二原子力発電所で勤務開始

32歳 東京電力を退職

現在 無職